Journal of Culture and Information Science, 10（1, 2）, 2-8,（March 2015）

研究ノート

ポスト・白人文化の創作原理

―ケネス・レクスロスの人と生涯（１）―

田口　哲也

本稿はアメリカの対抗文化の旗手のひとりであり、20 世紀後半のアメリカ文化に大きな影響を与えたケネス・レクスロスの思想が芸術表現にどのように反映されて来たかを内外の資料や同時代に生きた芸術家からの証言などをもとにして明らかにしていく。今回は日本文化の影響や現代における再評価の必要性について記述する。

1. はじめに

ケネス・レクスロス（Kenneth Rexroth, 1905-1982）は 20 世紀のアメリカが生んだ偉大な詩人･画家･思想家であり､筋金入りの平和主義的アナーキストでもある。彼は単に体制だけでなく、その体制が強要する表現形式にも徹底的に反抗した、闘う芸術家だった。例えばレクスロスの次のような作品はとても教科書には載らないだろう。

Portrait of the Author as a Young Anarchist

1917-18-19,
While things were going on in Europe
Our most used terms of scorn or abuse
Was“bushwa.”We employed it correctly,
But we thought it was French for“bullshit.”
I lived in Toledo, Ohio,
On Delaware Avenue, the line
Between the rich and poor neighborhoods.
We played in the jungles by Ten Mile Creek,
And along the golf course in Ottawa Park.
There were two classes of kids, and they
Had nothing in common: the rich kids
Who worked as caddies, and the poor kids
Who snitched golf balls. I belonged to the
Saving group of exceptionalists
Who, after dark, and on rainy days
Stole out and shat in the golf holes. [1]

若きアナーキストの著者の肖像

一九一七、一八、一九年と
ヨーロッパでことが起こっていた時に
ぼくらがもっともよく使ったあざけり語は
“ブシュワ”だった。正しく使ったことは使ったが
そのフランス語は糞ったれのブルシットだと
思っていた
当時住んでいたのはオハイオ州のトレドで
デラウェア通りが
金持ちと貧乏人の境界線になっていた
テン・マイル・クリークのそばの繁みで遊び
それからオタワ公園のゴルフ場に進んだ
二つの階層の子供たちがいて連中に
共通点はなかった。金持ちの子供は
キャディーとして働き、貧乏人は

[1] “Portrait of the Author as a Young Anarchist,”Sam Hamill and Bradford Morrow (eds.), *The Complete Poems of Kenneth Rexroth* (Copper Canyon Press, 2003), p.596. 試訳は田口哲也による。なお、“ブシュワ”は｢ブルジョア｣と解して読むと面白い。

ゴルフボールをくすねた。ぼくが属していたのは
数少ない例外が集まるところで
日が暮れると　そして雨の日に
こっそりと忍び込んでは
玉が入る穴にうんこをした

もともと詩はサブバーシヴ（＝体制転覆志向）な可能性を秘めているので、この作品のようにその政治的なメッセージ性が極めて明示的である場合、すなわちサブバーシヴであると作品が体制によって認定された場合「検閲」にかかるのは当然だ。

桜の下、アメリカ大使館主催の朗読会、1978 年
（写真＝ジョン・ソルト）

そのレクスロスの芸術家や思想家としての発展はもちろん欧米の近代の歴史的発展とは切り離せないのだが、西欧の近代の展開にそれほど詳しくない日本の読者に初めて聞く固有名詞を連発するよりも、まずレクスロスと日本との関係を先に述べておく。レクスロスは様々な意味において日本人にとって恩人であるが、彼の日本贔屓は決して皮算用的な計算に基づいた異国趣味を売り物とする「文学的商人」の悪知恵から出たものではなく、西洋文明没落後の世界を見据えた真摯な理解に基づくものである。エズラ・パウンド（Ezra Pound）の孔子へののめり込みはつとに有名だが、レクスロスはパウンドと違って実際に中国語や日本語の読み書きができ、完璧ではなかったかもしれないが、会話すら可能であった。レクスロスは西洋近代が生み出した資本主義と個人主義が地球を最終的に破壊しかねないことを早くから懸念していた。だからこそ長期間にわたる東洋文化への傾倒は、彼の理想とした「愛の共同体」の可能性を、例えば、日本文化の中に探し出そうとした姿勢となって現れたとも解釈できる。

2. レクスロスと日本

レクスロスは 1967 年に初めて日本にやってきて、京都に滞在している。だが、レクスロスが日本の文化に興味を持ち始めたのは幼少の頃からで、その影響はすでに 1944 年の詩集『不死鳥と亀』（*The Phoenix and the Tortoise*）に認めることができる[2]。名訳、『日本の詩百選』（*One Hundred Poems from the Japanese*）の出版は 1955 年のことであるが、リー・バートレット編の『ケネス・レクスロスとジェイムズ・ロックリン往復書簡集』によると、レクスロスは 1947 年の時点でこの詞華集をすでに完成していることが分かる[3]。

1940 年代、特にその前半は日米関係が最悪の時期であったが、レクスロスは戦争中に良心的兵役拒否の姿勢を貫き通しただけでなく、財産を没収され、強制収容所へと連行される日系アメリカ人を陰に陽に手助けしたらしい。現代アメリカ詩と日本文化の関係についての世界的な権威である児玉実英同志社女子大学名誉教授によれば、当時、仏壇を預かってくれというリクエストにはさすがのレクスロスも困ったようである[4]。後年、ジャック・ケルアックなどの東海岸から流れてきたビートの詩人たちをレクスロスが軽蔑したのは、彼らの傍若無人な振る舞いに加えて、彼らがこのような東洋文化や東洋人との日常的な接触がなかったからである。

したがって、レクスロスの日本への関心は、古典文学に限られたものではなく同時代の詩人にも向けられていた。とりわけ北園克衛とは長い交流があった。レクスロスと関係の深かった詩人で、日本文学の研究家でもあるジョン・ソルト（John Solt）の精力的な研究や紹介によって、2013 年の LACMA（ロサンゼルス郡立美術館）での展覧会など、北園はアメリカでも再び高い評価を受け始

[2] アメリカ現代詩と日本文化の影響関係に関しては Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture* (Hamden, Connecticut; Archon Books, 1984) が参考になる。特にレクスロスの「本歌取り」の技巧についての詳しい解説がある。

[3] Lee Bartlett (ed.), *Kenneth Rexroth and James Laughlin: Selected Letters* (Norton, 1991), p.88.

[4] 収容所への持ち込みは手荷物に限られていたため、多くの日系アメリカ人は似たような願いをアメリカ人にしたのだが、高価なものはほとんど返還されなかったと言う。

めている[5]。1978年京都「ほんやら洞」での片桐ユズルの司会による、白石かずことのジョイント・リーディングの際、レクスロスは北園克衛が自分の長年の親友であり、彼の優れた詩が今日あまり読まれていないのは、どういう理由があるにしろとても残念なことだと語った。

「ほんやら洞」のレクスロス（右隣は白石かずこ）

日本にやって来たレクスロスは、古典文学が生きた世界として今なお日本に残っていることに強い感動を覚え、ペンクラブの大会への参加に伴う短期間の滞在の後、丸一年にわたる京都生活を送り、その後も何度かの日本滞在を果たす。レクスロスの生涯と日本に来てからの足跡については、「年表」を見ていただきたいが、彼と「生」の日本との出会いはいくつもの新しい情熱に満ちた詩篇を紡がせることになる。それらの作品は、『新詩集』（*New Poems*）や『明星』（*The Morning Star*）にまとめられていく[6]。『摩利支子の愛の歌』（*Love Poems of Marichiko*）は若く、奔放な日本人女性が一人称で、性愛の喜びを歌った短詩を集めたものとなっているが、実際にはレクスロス自身の作品で、完成度の高い重要な作品集である。サンフランシスコでビートを同時代に経験した稀有な詩人で、レクスロスが絶大な信頼を寄せていた片桐ユズルによる名訳には「復元の試み」という副題が付いている。レクスロスが立川真言に並々ならぬ関心を寄せていたことは有名だが、神

年譜	中山容・神田稔
1905	インディアナ州サウス・ベンドに生まれる。父チャールズは薬剤師。母デリア（デラ）は父とともに進歩的な人だった。
1916	母の死を機して、オハイオ州トレードに移る。
1918	父は商売に失敗し、アル中になり死ぬ。
1918 ｜ 1921	シカゴのサウスサイドの叔母にひきとられる。画家、詩人、俳優、ジャーナリストとしてラジカルな活動に参加。シャーリー・ジョンソンとの恋愛を続けるためにはじめて、東海岸へ旅に出る。
1927	アンドレア・ダッチャーと結婚。サンフランシスコへ移る。
1940	アンドレア病死。マリー・キャスと結婚。
1949	マーサ・ランと結婚。
1950	メアリー誕生。
1954	キャサリーン誕生。
1956	サンフランシスコ・ルネッサンスに指導的役割をはたす。
1967	来日。同志社大学と東京のピットインで朗読会。
1968	Classics Revisited 出版。カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の講師になる。
1972	日本文化研究国際会議（京都）に参加。 Morgan Gibson の *Kenneth Rexroth*（Twaynes）出版。
1974	京都精華短大で講演。
1975	京都アメリカン・センターで講演と朗読会。京都ほんやら洞朗読会。 「ポエトリー・エクスチェンジⅡ」に出席。（京都 YWCA）第 1 回ケネス・レクスロス詩賞（以後毎年 12 月に受賞者朗読会がつづく）
1978	ケネス・レクスロス詩賞入賞者による K.R. 歓迎朗読会（京都アメリカン・センター）、ケネス・レクスロスと白石かずこの詩朗読会（ほんやら洞）、ほかに京都アメリカン・センターでの「現代アメリカ詩に関するラウンド・テーブル・ディスカッション」、同志社女子大学での講演と朗読。
1980	東京「'80 地球の詩祭＋国際詩人会議」に参加。第 6 回ケネス・レクスロス詩賞入賞者朗読会に出席。京都精華大学で朗読会。
1981	第 7 回ケネス・レクスロス詩賞入賞者朗読会。
1982・6・6（日）	自宅にて死去

《資料》 京都アメリカン・センター
モーガン・ギブソン
ほんやら洞の詩人たち

[5] ジョン・ソルト、『北園克衛の詩と詩学――意味のタペストリーを細断（シュレッド）する』、思潮社、2010年。

[6] レクスロスは与謝野晶子の短歌を多数英訳しているが、この *The Morning Star*は晶子の夫である与謝野鉄幹が結成した東京新詩社の機関紙である『明星』からとられた。晶子は奔放で、情熱的な作品を多数寄せた。

秘主義と性愛が結びつく極限の表現が日本語でも読めるのは日本の読者にとって福音である。なお、京都の縄手四条と東京の上野にある摩利支天はインド伝来の仏教の教えが色濃く残っている珍しい場所であるが、ヒンズー的な雰囲気の残るこの寺院は娼婦や侍たちの霊を慰める場所でもある[7]。

レクスロスは、前述の白石かずこを始めとする日本の現代詩人、とりわけ女性の詩人の紹介を精力的に行う。白石の *Seasons of Sacred Lust: The Selected Poems of Kazuko Shiraishi* や渥美育子との共編による *Women Poets of Japan* などは現在でも入手可能であり、これはレクスロスのもう一つの大きな業績である。さらに別表で示したように、レクスロスは日本の女性詩人を鼓舞しようと、私財を投じて 1975 年から 81 年まで続いた「ケネス・レクスロス詩賞」を設けた。

『日本の詩百選』はアメリカの読者の間で好評を博し、その後に出た『続日本の詩百選』（*One Hundred More Poems from the Japanese*）などと併せてクリスマス・プレゼントとしてよく購入されたと言われている。ソルトのハーバード大学大学院時代の恩師、ハワード・ヒビットは、日本の古典詩の翻訳はレクスロスのものが英語の詩としては一番だと語っていたという。翻訳家としての一面を記述し始めるときりがないくらいにレクスロスの功績は大きい。ギリシャ語、スペイン語、中国語、フランス語など様々な言語からの翻訳がある。日本の文化、とりわけ日本の詩歌を英語圏に紹介し、しかも優れた英語の文学作品として結実させたレクスロス自身の選詩集が日本で出版される日が待ち望まれる。レクスロスの精神を受け継ぐアメリカ西海岸の詩人のひとりであるドーレン・ロビンズ（Doren Robbins）は、「和泉式部から与謝野晶子、白石かずこまで、日本の詩歌を世界的に有名にしたのに日本で彼自身の本が手軽に読めないのは驚きだ（談）」という指摘があるが、日本人にとってこれほど耳に痛いことばはない。

[7] 摩利支天に関しては児玉実英、「レクスロスと女性――永遠のマリシテン像を求めて」、「星座」（矢立出版、1982年）別冊 1を参照のこと。

ケネス・レクスロス詩賞
受賞者・佳作者一覧

日本語部門	英語部門
1975 年（第 1 回）	
児玉実英選	片桐ユズル選
入賞　なし	入賞　リンダ・アーリック
佳作　肥田ひかる	
平林優子	
1976 年（第 2 回）	
有馬敲選	モーガン・ギブソン選
入賞　田口育子	入賞　ウィニー・アン・イヌイ
佳作　徳田サナエ	佳作　赤西光子
浜田珠子	
船越政子	
1977 年（第 3 回）	
秋山基夫選	イーデス・シファート選
入賞　井上志津子	入賞　奥田由香里
特賞　籠池友未子	佳作　エリン・ミドリ・モリタ
佳作　榊山裕子	吉田ほかる
朋来りん	
中野万紀子	
1978 年（第 4 回）	
片桐ユズル選	ジョン・ソルト選
入賞　億川れい子	入賞　塩見真弓
佳作　鍵山純子	佳作　宮崎綾子
北田静子	
福本早穂	
1979 年（第 5 回）	
福中都生子選	ニコラ・ガイガー選
入賞　金洋子	入賞　花岡真紀子
佳作　池田由美子	佳作　河野桂子
石井昌子	森　祐希子
永井知子	
西海ゆう子	
1980 年（第 6 回）	
永瀬清子選	レベッカ・ジェニソン選
入賞　川端あや子	入賞　高嶋裕美
佳作　川田敬子	佳作　河野桂子
木本　好	田中美穂子
新谷葉子	森　祐希子
長野奠子	
山中従子	
特賞　渡海直美	
1981 年（第 7 回）	
茨木のり子選	メレデス・マッキニー選
入賞　寺本まち子	入賞　河野桂子
佳作　大上ミツ子	佳作　小森栄子
田草川きみえ	苗田澄江
長野奠子	
名古きよえ	
西海ゆう子	

3. アメリカ合衆国発の「ビッグ・マン」

レクスロスはいわば「セルフ・メイド・マン」（“self-made-man”）の一典型である。インディアナ州で生を受け、その後多感な青春時代を当時世界で屈指の文化的な先進地であったシカゴで過ごす。シカゴでの波瀾万丈の人生は『自伝的小説』（*An Autobiographical Novel*）に詳しい。ネットにさえ繋がれば何でも分かるという「グーグル的展開」以降の世界の住民からすると驚異的としかいいようのないレクスロスの知識量は、定評ある百科事典『ブリタニカ』全巻を毎年読み直すという驚くべき努力の結果であった。

レクスロスの博識ぶりを示す例をひとつあげよう。「ロサンゼルス・タイムズ」紙の書評欄を1952年から死ぬまで担当したロバート・カーシュ（Robert Kirsch, 1922-1980）は、次のように述べている。

「私が挙げた名前がどんなに不明瞭であろうと、アルバニアやズールー族の文学について、ケネスから博識な答えや興味深い逸話がもたらされないことは一度もなかった。ケネスの話すことは決して平凡で退屈ではなく、常につながりがある。生活と言葉、人々と場所が互いに響き合うセンス、複雑で興味深い感受性、それこそが詩人および評論家としてのケネスの偉業である。詩とジャズの組み合わせで先達となって以来、すべては容易で自然に思えた。日本とアメリカの文化の架け橋になるのも、ケネスが求める相互のつながりからだ。組み合わせの妙であり、対照の妙である。チェーンメールのようにさりげなく物事を結びつけて、人生の本質を描き出す方法を彼は知っている。」[8]

しかもこれらの知識は公教育を通してではなく、自己学習によったというところが如何にも自主独立を重んじるアメリカのよき伝統でありセルフ・メイド・マン的である。日本では自己教育を見下す傾向がいまだに強いが、小山俊一によれば、教育の本質は自己教育現象にあるのであり、枠組みにとらわれない自由な発想から、その膨大な知識を活用すれば驚くべき知恵や知見が結果として生まれる。

因にこの『ブリタニカ』の「文学」（The Art of Literature）の項目執筆はレクスロスによるものであり、レクスロスはその博学をフルに発揮して世界中の、古代から現代までの文学を縦横無尽に論じており、文学研究者一般にとって、いわばバイブル的存在である。

ケネス・レクスロスの作品を理解するためには、この極めてアメリカ的な特質を理解しておくことが重要である[9]。レクスロスの詩人としての等身大のイメージは、片桐ユズルによる貴重なレクスロスの日本での朗読会の記録である「ほんやら洞のケネス・レクスロス」（京都精華大学「木野評論」第14号）で鮮明に浮かび上がる。アメリカでのある朗読会の出来事である。「私の作品には革命、エロティシズム、神秘思想といったジャンルがある」と詩人が語ると、間髪いれずに聴衆の中のひとり

[8] Robert Kirsch, “On Kenneth Rexroth,” Geoffrey Gardner (ed.) *The Ark* 14, pp.45-46. 青木映子訳。引用中の強調は筆者による。

[9] 日本におけるアメリカの現代詩の理解が過去において歪められていた事実は例をあげ始めるときりがない。ビートとレクスロスの関係についてはその最たるもので、これについては拙著『ケネス・レクスロス中心の現代対抗文化』（国文社、2015年）を参照のこと。なお、1961年現在で英米の現代詩に最も詳しい日本の最高峰の知性からの発言であることを認識したうえで、以下の引用に目を通してもらいたい。

「あれは（＝レクスロスのこと）諏訪さん（＝諏訪優）がいま言ったように複雑な経路を通って、イマジスティックなわりに現実主義的なところがあって、一挙に社会主義に入って、それであれはプロレタリア詩人ですよ。スターリニズムを遵奉した極端な社会主義者になって、それからまた出ていって、戦争前のマクリーシュやなにかが転換したときに出ていって、戦後になったらロレンスに来ているんですよ。ロレンスとシュワイヴァー（シュヴァイツアー？）なんですよ。それが今度ビートに来たんですね。」

1972年に英語圏で最初にレクスロスの研究書をものしたモーガン・ギブソン（Morgan Gibson）がまだウィンスコンシンにいた頃、朗読会で、会場からの質問に答えてレクスロスは「あまりにもアナーキスト的だという理由で共産党への入党を拒否された」話をしたと言われている。上記の発言者が述べているレクスロスの略歴は何を根拠にしたものなのだろう。「それが今度ビートに来たんですね」というような基本的な事実の誤認はともかく、「スターリニズムを遵奉した極端な社会主義者」であったという指摘は事実と大きく異なる。このような誤解はどこから来たのであろうか。日本人のアフリカ系アメリカ人に対する身体的特徴に基づいた差別意識が、北米大陸の白人の差別意識の「模倣」である場合が多いように、1960年代の日本のインテリのレクスロス理解が北米のエスタブリッシュメントのそれに大きく影響されている可能性は大きい。笑うに笑えない現実である。

「座談会　ウィリアムズについて　安藤一郎、上田保、鍵谷幸信、諏訪優、福田陸太郎」、「無限」1961　冬季号、103頁。発言は安藤によるもの。

の女性が「どこに違いがあるの？」という突っ込みを入れたエピソードをレクスロスは気に入っていたらしく朗読会でしばしばこのジョークを使っていた。

1920 年代、30 年代のシカゴを生き抜いたレクスロスはおよそあらゆる類いの芸術的、政治的実験に参加している。平和主義的アナーキズム、サンディカリズムのさなかにいたレクスロスは決して少数派ではなかった。日米で起きた急速な産業化、資本主義の拡大は著しい社会矛盾を露呈し、ちょうど大正デモクラシーが大杉栄という希有なアナーキストとその惨殺を生み出したように、レクスロスは IWW に結集した労働者たちの高揚とサッコ＝ヴァンゼッティ事件に象徴される巨大な「社会的嘘」を見せつけられる。実際「サッコ＝ヴァンゼッティ事件」を検索エンジンに掛けてみると、激しいことばで抗議する自作を朗読するレクスロスの動画にたどりつくことができる[10]。

19 世紀のパリ・コミューンから 20 世紀のベトナム反戦運動まで、民衆にとって革命は目の前の生身の男女の裸身のようにリアルであった。レクスロスが歌い上げた革命と自由恋愛の焔は作品となって結晶し、その作品を通して私たちは彼らの革命や恋愛を追体験することが可能である。

かつて大学のことを「霧の工場」と呼んだレクスロスは自分の作品がアカデミックな教材として取り上げられることになるとは思っていなかったはずだ。ではアカデミズムの外の言論界が彼の業績を評価しようとしないのはなぜであろうか。誰か明確な否定の理由を述べたことがあるのだろうか。あるいは、レクスロスのような知性が次世代に影響を与え、多くの人々の間で拡散すると何かまずいことでもあるのだろうか。

1978 年、京都市の同志社大学に近い、今出川寺町西入ルにある、対抗文化の聖地「ほんやら洞」で開かれたレクスロスの朗読会に参加したおり、いきなり冒頭で「私の多くの左翼思想家の友人や労働運動の活動家の同志はコンクリート詰めになってサンフランシスコ湾に沈められた」と物凄い勢いで語り始めた詩人に圧倒された。1960 年に警察の実態を率直に語ったために、ハースト系の新聞の人気コラムニストの職やその他２つの職を奪われたり、あるいは、反体制的なレクスロスの言動を快く思わない大学当局によって、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の職を奪われそうになったり、レクスロスは権力による露骨な弾圧や貧困を耐え忍び、生き残ったアメリカの良心を代表する高潔な人物であった。

現在、レクスロスという詩人の存在が軽んじられている理由のひとつは、レクスロスたちが生み出したかつてのような詩人と読者の直接的な結びつきが霧散してしまったからである。猛烈な速度と規模で発達が続くテクノロジーを駆使し、天文学的な数の言説が巨大なメディアのネットワークを通して垂れ流され、巨大資本による圧倒的な CM やマーケティング、さらには大手の流通を通さなければ、アントニオ・グラムシの言う「文化的覇権（ヘゲモニー）」を握れない構造になってしまったからだ。だが冷静に考えてみれば、問題はこの圧倒的な市場経済が、自然を書き換え、自然を征服するという西欧近代文明の最新の発展段階であるとするなら、この市場経済を査定し、調整するチェック機能を人類が失ってしまうとどうなるかである。すべてを食い尽くす市場経済という「妖怪」はやがて人間環境を破壊する運命にあることは明明白白である。レクスロスはすでに 1956 年にニュー・ディレクションズ社から *In Defense of the Earth* と題された詩集を出版しているが、彼はしばしば数カ月ものあいだに山中に籠り、自然との共生の実験を試みていた事実はとりわけ重要である。

「共産主義者」即ち、ロシア・マルクス主義の系譜に繋がるイデオローグ特有の単純な「君か僕か」式の全体主義的なドグマに陥らずに、レクスロスが資本主義社会の巨大な矛盾を赤裸々に指摘できたのはなぜであろうか。

冒頭で触れた『自伝的小説』の中にある挿話が示唆的である。レクスロスは 16 歳の時に未成年であるにも拘わらずナイトクラブを運営していたために、シカゴの刑務所に送られ、そこでアフリカ系アメリカ人の囚人と互いの体を暖め合って寒さをしのいだという。1961 年のコラム「ブラック・ムスリム」の中で、レクスロスはアフリカ系アメリカ人への強烈な連帯を表明しているが、1960 年代初めのアメリカの有無を言わせない白人至上主義の状況を考えれば、そのずば抜けた勇気には驚かされる。

優れた詩人に与えられるカルフォルニア賞を受賞したときに式に出席するために上着を隣人に借

[10] これは現存する唯一のレクスロスの動画である。

りなければならないほど貧乏だった。この金銭的困窮は何を意味するのだろう。リー・バートレット編の書簡集から様々なエピソードが読み取れるが、元来発表を前提に書かれたものではないので、レクスロスはしばしば自らの窮状を親友のロックリンに訴え、その中にはかなり辛辣な表現も見られる。また、レクスロスの行動範囲の広さ、多様さが理解できるエピソードもある。レクスロスはサンフランシスコ時代に「黒人街」に住んでいた。ある日のこと、陰鬱なレストランで中産階級のスノッブな女性との長い話のあと、外に出たレクスロスは街路ですさまじい状態の女浮浪者を見つける。弱者を放っておけない詩人は彼女を助け、彼女の体を休める場所を探して街中のホテルのドアを叩く。しかし、どこでも拒否され、あげく、知り合いの売春宿にやっと女性を休ませる場所を見つけることができた。ところが、そこには、ひどいヘロイン中毒の東洋系の売春婦がいて、しかも彼女は詩人と顔見知りであった。この挿話を記した手紙の末尾で「私の交友関係はどうなっているのだろう」とレクスロスが呟く。

ビート全盛の時代の頃の話だが、当時ビートの生みの親として有名だったレクスロスを「タイム」誌の表紙記事にすべく記者が詩人を訪ねてきた。この記者はレクスロスに会うまでは、エコロジーやアナーキズム、あるいは東洋文化などには関心がなかったのだが、レクスロスの話に強い感銘を受け、自分の仕事がいかに空しいかを悟って、記者を辞めてヒッピーになったという。この結果、「タイム」誌の表紙を自分の写真で飾る機会を永遠に失ったのだが、レクスロスは落胆するどころかこの結末にとても満足していたという。

レクスロスは『自伝的小説』の中でも、彼の絵の才能を見込んで多額のギャラをオファーされたことに対する違和感を表明しているが、彼はそもそも資本主義的な金銭価値に疑問を持っていた。体制側によって幾度も経済的な困窮に追い込まれたレクスロスであるが、新しい芸術的価値の創造は私たちの審美眼に語義の本来の意味において直接働きかけ、その結果、集団的選択を正しい方向に導くと、対抗文化の旗手は考えたのではないか。